【41】

氏　名（本籍）	許　丙燦（韓　国）
学位の種類	博　士（デザイン学）
学位記番号	博　甲　第　5562　号
学位授与年月日	平成22年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**シークエンス写真の表現方法に関する研究** －デュアン・マイケルズの作品を通して－

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	蓮見　孝
副　査	筑波大学教授		逢坂卓郎
副　査		学術博士	飯沢耕太郎

論文の内容の要旨

(目的)

本論文は、シークエンス写真の意義を、特にその手法に注目する事で明らかにしようとするものである。高度な技術による映像の発展は、私達を非日常世界へ容易く導き入れ、芸術へも大きな影響を与えてきた。同様に写真もまた表現メディアとして長い歴史を持ち、独自の道を築いて来た。'写真' という領域に 'シークエンス' という映画の技法を取り入れたものがシークエンス写真の世界である。1960年代にデュアン・マイケルズにより数枚の写真を連続的に並べるという作品から始まった表現技法は、多くの芸術家達に刺激を与え今日まで継承されている。今まで研究されていなかった表現手法を中心にデュアン・マイケルズの作品の分析を行い、その結果からシークエンス写真の表現技法と特徴を明らかにする事が本論の目的である。

(対象と方法)

研究の対象としては、デュアン・マイケルズと彼のシークエンス写真、その背景にあるシュールレアリスムの作品およびルネ・マグリットとマン・レイを取り上げた。

第1章では、シークエンス写真の概要について説明を行った。1. 起源は、連続したイメージを用いた表現方法が歴史的な記録や科学的な検証のために用いられてきた事。2. 構成は、フレームの配列とその物語構造による事。3. フレームの概念では、フレームは映像を構成している最小の単位である事とフレームの配列に関連するモンタージュ技法、時間制、空間性について解説を行った。4. 物語性については、写真の読み取り方により鑑賞者の連想作用を生む事を指摘した。

第2章では、シークエンス写真の完成者であるデュアン・マイケルズの独自性や業績を明らかにする為に作品を通して思想の形成過程を探り、社会との関係、マン・レイの影響などを通してシークエンス写真に至った経緯と作品の原点について言及している。また、マイケルズの作品の傾向を明らかにする為に、そのテーマと形式の分析を行った。動作の連結、イメージの連結、キャプション付き、という三つの形式。作品の中に潜んでいるテーマがシュールレアリスムの特徴と二重性とに関連している事。フレームどうしをつなぐ形式を通して、鑑賞者が作品の中に介入できるような開かれた構造である事を示した。

第３章では４つの代表的な作品を内容と表現に分け、特に代表的な作品「Alice's Miller」について、シークエンスの構成、時間、空間、視点、カメラアングル、画面の中、などの項目から詳細な分析と解釈を行なった。その結果、シークエンス写真に潜むテーマの現れ方、フレーム内の構成とフレームどうしの構成を通してシークエンス写真の表現技法について解説を行った。

第４章では、第１章から３章までの研究に基づき、シークエンス写真の構成形式を整理し表現技法を体系化した。その結果、構造が物語構造とフレームの配列の二つの軸により成立している事。表現技法における主な特徴は構成、間隔、時間制と空間性、カメラアングルと視点、画面構成、厳選されたフレーム、である事とした。作品の読み取り方では、象徴、連想、鑑賞、という鑑賞者の行動を通した共通する印象を引き出した。その結果、シークエンス写真は作家と鑑賞者双方にコミュニケーションをもたらす手法である事を指摘している。

結章ではシークエンス写真は鑑賞者に自分のペースで作品を鑑賞し、フレームの中やフレームどうしの間に流れる時間と空間を通して鑑賞できる許容量の広い形式であるとした。更に鑑賞者の固定観念や予想を覆す効果により鑑賞者に自我意識を蘇らせ、自分のアイデンティティに触れる事ができる現代において意義ある芸術形態であると結論付けた。展望では更なる研究と、作品の展開の可能性について述べた。

(考察)

著者は従来の写真でもなく、映画でもない独特な領域を構築してきたシークエンス写真に注目し、その世界と手法の魅力を明らかにする為に、完成者であるデュアン・マイケルズの作品の分析を詳細に行った。その結果、フレームとフレームの関係性が最も重要な要素であると判断した。6個の構成要素と配列および物語構造によりシークエンス写真の表現技法を体系化し、鑑賞者がフレームの間を往復して鑑賞する時間と空間の間に多様な世界を現して見せるという手法を見いだした。このように考察を重ねて鑑賞するシークエンス写真はコミュニケーションが課題とされる現代において評価するに相応しい表現様式であると言える。

審査の結果の要旨

先行研究では積極的に行われていなかったデュアン・マイケルズの表現形式の分析を行うことで、シークエンス写真の表現技法を明らかにしようとした取り組みは、学術的意義を有した独自の研究である。本論は制作者側の作品形式と物語性、鑑賞者側の鑑賞行為と時間という二面性からの学術的な作品分析の方法論により、デュアン・マイケルズの作品の特徴を分析項目として引き出そうとした労作である。詳細な分析からシークエンス写真の表現技法を体系化した結果、時間的、空間的な不連続性から、鑑賞者が作品を通して様々な意味を発見できる事を指摘した。この事からシークエンス写真が人間に潜在する形而上学的な主題を見いだす表現形式を持ち、鑑賞者の関わり方により多様な世界を展開するという新しい解釈について、有用で信頼性のある結論が得られていると評価できる。以上から、本論文はシークエンス写真表現における意義ある研究であり、必要にして十分な記述がされており、写真表現分野における学術の進展に寄与し、研究の発展性が期待できると判断した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。